

# 圏論ノート 000 積とイコライザで極限を作る

近藤友祐 (@elecello\_)

初稿: 2019 年 10 月 25 日 更新: 2019 年 10 月 28 日

この文書の場所: <https://elecello.com/works.html>

本稿では、圏  $\mathbf{D}$  の対象全体のクラスを  $\text{ob}(\mathbf{D})$ , 射全体のクラスを  $\text{arr}(\mathbf{D})$  と書くことにする.

**定理 1.**  $\mathbf{C}$  を, 任意の (集合サイズの) 積とイコライザをもつ圏,  $\mathbf{J}$  を small な圏とする (i.e.  $\text{ob}(\mathbf{J})$  も  $\text{arr}(\mathbf{J})$  も集合). このとき,  $\mathbf{C}$  は任意の図式  $D: \mathbf{J} \rightarrow \mathbf{C}$  に対する極限を持つ.

*Proof.*  $\mathbf{C}$ ,  $\mathbf{J}$  を仮定のようなものとし, 図式  $D: \mathbf{J} \rightarrow \mathbf{C}$  を任意にとる. 以降, 慣例にならって,  $\mathbf{J}$  の射  $u: i \rightarrow j$  の  $D$  での像を  $D_u: D_i \rightarrow D_j$  などと書くことにする.

$\text{ob}(\mathbf{J})$  は集合だから離散圏とみなせる. それを  $\mathbf{J}_0$  と書くことにする. すなわち  $\text{ob}(\mathbf{J}_0) = \text{ob}(\mathbf{J})$ ,  $\text{arr}(\mathbf{J}_0) = \{1_j : j \in \text{ob}(\mathbf{J})\}$  (ただし  $1_j$  は形式的に付け加えられた恒等射) である. 函手  $F: \mathbf{J}_0 \rightarrow \mathbf{C}$  を,  $j \in \text{ob}(\mathbf{J}_0)$  に対し  $F(j) = D_j$  とすることで定める (射の行き先の定め方は明らか). 定理の仮定により,  $F$  の極限が存在する. つまり,  $P \in \text{ob}(\mathbf{C})$  と  $\{p_j \in \mathbf{C}(P, F(j)) : j \in \text{ob}(\mathbf{J})\} \subseteq \text{arr}(\mathbf{C})$  の二つ組であって

$$(\forall X \in \text{ob}(\mathbf{C}))(\forall \text{family } \{f_j \in \mathbf{C}(X, F(j)) : j \in \text{ob}(\mathbf{J})\})(\exists! v: X \rightarrow P)(\forall j \in \text{ob}(\mathbf{J}))(p_j \circ v = f_j) \quad (1)$$

を満たすものが存在する. 定義にしたがって  $F(j)$  を  $D_j$  と書き換えると見やすくなるかもしれない.

同様に,  $\text{arr}(\mathbf{J})$  は集合だから離散圏とみなせる. それを  $\mathbf{J}_1$  と書くことにする. すなわち  $\text{ob}(\mathbf{J}_1) = \text{arr}(\mathbf{J})$ ,  $\text{arr}(\mathbf{J}_1) = \{1_u : u \in \text{arr}(\mathbf{J})\}$  (ただし  $1_u$  は形式的に付け加えられた恒等射) である. 函手  $G: \mathbf{J}_1 \rightarrow \mathbf{C}$  を,  $u \in \text{ob}(\mathbf{J}_1)$  に対し  $G(u) = D_{\text{cod}(u)}$  とすることで定める (射の行き先の定め方は明らか). 定理の仮定により,  $G$  の極限が存在する. つまり,  $Q \in \text{ob}(\mathbf{C})$  と  $\{q_u \in \mathbf{C}(Q, G(u)) : u \in \text{arr}(\mathbf{J})\} \subseteq \text{arr}(\mathbf{C})$  の二つ組であって

$$(\forall Y \in \text{ob}(\mathbf{C}))(\forall \text{family } \{g_u \in \mathbf{C}(Y, G(u)) : u \in \text{arr}(\mathbf{J})\})(\exists! w: Y \rightarrow Q)(\forall u \in \text{arr}(\mathbf{J}))(q_u \circ w = g_u) \quad (2)$$

を満たすものが存在する. 定義にしたがって  $G(u)$  を  $D_{\text{cod}(u)}$  と書き換えると見やすくなるかもしれない.

弁解. こんなことをネチネチと書いた理由を弁解しておく. Awodey 本 [1], レンスター本 [3] では, 本稿の  $Q$  に相当するものはだいたい

$$\begin{array}{ccc} \text{[Awodey]} & \prod_{(u: i \rightarrow j) \in \mathbf{J}_1} D_j & \text{[レンスター]} \prod_{\mathbf{J} \text{ の } i \xrightarrow{u} j} D(j) \end{array} \quad (3)$$

と一言書かれているだけでほとんど説明がない. これでは意味不明というか, 誤解が生じかねないのであまり良くないと思う. なので, ここでカッチリと定義しておきたかったのである. (弁解終)

**Claim 1.**  $(\exists! \varphi: P \rightarrow Q)(\forall u \in \text{arr}(\mathbf{J}))(q_u \circ \varphi = p_{\text{cod}(u)})$ .

$$\begin{array}{ccc} P & & \\ \varphi \downarrow & \searrow p_{\text{cod}(u)} & \\ Q & \xrightarrow{q_u} & G(u) = D_{\text{cod}(u)} \end{array}$$

( $\because$ )  $Q$  の普遍性 (2) において特に  $Y := P$ , 各  $u \in \text{arr}(\mathbf{J})$  に対して  $g_u := p_{\text{cod}(u)}$  として得られる  $w$  を  $\varphi$  とすればよい. □(Claim 1)

**Claim 2.**  $(\exists! \psi: P \rightarrow Q)(\forall u \in \text{arr}(\mathbf{J}))(q_u \circ \psi = D_u \circ p_{\text{dom}(u)})$ .

$$\begin{array}{ccccc} & & & & P \\ & & & & \downarrow p_{\text{dom}(u)} \\ & & & & D_{\text{dom}(u)} \\ & & & & \downarrow \psi \\ & & & & Q \\ & & & & \downarrow q_u \\ D_{\text{cod}(u)} = G(u) & \leftarrow & & \leftarrow & \end{array}$$

( $\because$ )  $Q$  の普遍性 (2) において特に  $Y := P$ , 各  $u \in \text{arr}(\mathbf{J})$  に対して  $g_u := D_u \circ p_{\text{dom}(u)}$  として得られる  $w$  を  $\psi$  とすればよい. □(Claim 2)

Claim 1 と Claim 2 で得られた平行射  $\varphi, \psi$  に対し, 定理の仮定によってそれらのイコライザ  $(E, e)$  が存在する. 各  $j \in \text{ob}(\mathbf{J})$  に対し,  $e_j := p_j \circ e$  と定める.

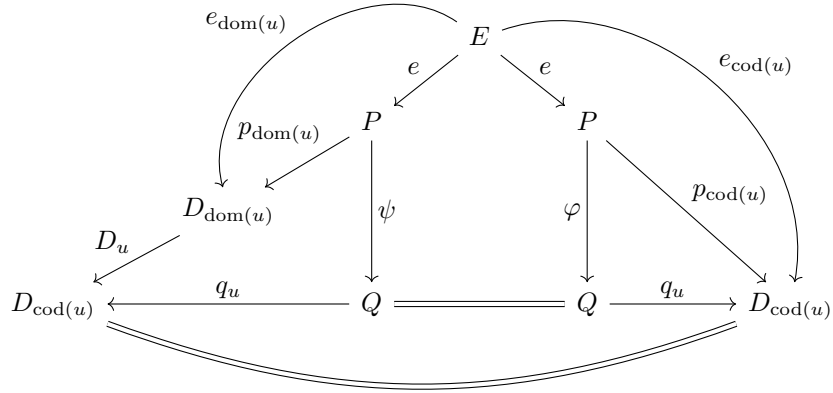
$$\begin{array}{ccccc} E & \xrightarrow{e} & P & \xrightarrow{\varphi} & Q \\ & \searrow e_j & \downarrow p_j & \searrow \psi & \\ & & D_j & & \end{array} \quad (4)$$

$E := \langle E, \{e_j \in \mathbf{C}(E, D_j) : j \in \text{ob}(\mathbf{J})\} \rangle$  が  $D$  の極限錐であることを示して証明を完了する. まずは錐であることを示す:

**Claim 3.**  $E$  は  $D$  への錐である. すなわち,  $\mathbf{J}$  の任意の射  $u: \text{dom}(u) \rightarrow \text{cod}(u)$  に対し,  $D_u \circ e_{\text{dom}(u)} = e_{\text{cod}(u)}$  が成り立つ.

$$\begin{array}{ccc} & E & \\ e_{\text{dom}(u)} \swarrow & & \searrow e_{\text{cod}(u)} \\ D_{\text{dom}(u)} & \xrightarrow{D_u} & D_{\text{cod}(u)} \end{array}$$

( $\because$ ) 下の可換図式より明らか. 中央の五角形は  $e$  が  $\varphi$  と  $\psi$  のイコライザであるから可換. 右と左の三角形の可換性は  $\varphi, \psi$  のとり方 (Claim 1 と Claim 2) から可換.



□(Claim 3)

最後に、この  $E$  が極限錐であること、すなわち、 $D$  への錐  $R = \langle R, \{r_j \in \mathbf{C}(R, D_j) : j \in \text{ob}(\mathbf{J})\} \rangle$  を勝手にとったとき、

$$(\exists! h: R \rightarrow E)(\forall j \in \text{ob}(\mathbf{J}))(e_j \circ h = r_j) \quad (5)$$

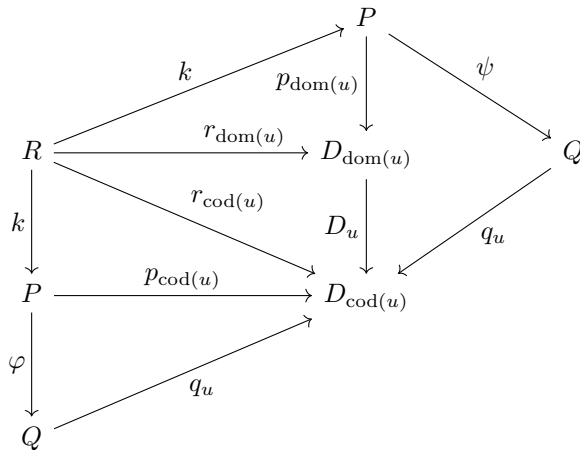
が成り立つことを示す。まず、

$$(\forall j \in \text{ob}(\mathbf{J}))(p_j \circ k = r_j) \quad (6)$$

を満たす唯一の射  $k: R \rightarrow P$  がとれる ( $P$  の普遍性 (1) において特に  $X := R$ , 各  $j \in \text{ob}(\mathbf{J})$  に対して  $f_j := r_j$  として得られた  $v$  を  $k$  とすればよい)。

**Claim 4.**  $(\forall u \in \text{arr}(\mathbf{J}))(q_u \circ \varphi \circ k = r_{\text{cod}(u)} = q_u \circ \psi \circ k)$ .

( $\because$ ) 下の可換図式より明らか。右の三角形は Claim 2 ( $\psi$  のとりかた)。左側の四つの三角形については上から順に：式 (6) /  $R$  は錐 / 式 (6) / Claim 1 ( $\varphi$  のとりかた)。



□(Claim 4)

さて,  $(\forall u \in \text{arr}(\mathbf{J}))(q_u \circ l = r_{\text{cod}(u)})$  を満たす射  $l: R \rightarrow Q$  は唯一つしか存在しない ( $Q$  の普遍性 (2) で  $Y := R, g_u := r_{\text{cod}(u)}$  として得られた  $w$  を  $l$  とせよ). Claim 4 により  $\varphi \circ k$  と  $\psi \circ k$  は  $l$  の資格を満たす射になっているので  $\varphi \circ k = \psi \circ k$  である. したがって,  $E$  のイコライザ性によって,

$$e \circ h = k \tag{7}$$

を満たすただ一つの射  $h: R \rightarrow E$  をとることができる.

$$\begin{array}{ccc} E & \xrightarrow{e} & P & \begin{array}{c} \xrightarrow{\varphi} \\ \xrightarrow{\psi} \end{array} & Q. \\ \uparrow h & \nearrow k & & & \\ R & & & & \end{array}$$

$e \circ h = k$  と式 (6), および  $e_j$  の定義  $e_j := p_j \circ e$  を合わせて

$$(\forall j \in \text{ob}(\mathbf{J}))(e_j \circ h = r_j) \tag{8}$$

を得る. よって式 (5) における  $h$  の存在が示せた. 一意性について.  $t: R \rightarrow E$  が  $(\forall j \in \text{ob}(\mathbf{J}))(e_j \circ t = r_j)$  を満たすとする.  $e_j$  の定義  $e_j = p_j \circ e$  より  $(\forall j \in \text{ob}(\mathbf{J}))(p_j \circ e \circ t = r_j)$  である.  $k$  の唯一性 (6) により,  $e \circ t = k$  でなければならない.  $h$  の唯一性 (7) より  $t = h$  である.  $\square$

**系 2.**  $\mathbf{C}$  を, 終対象と二項積とイコライザをもつ圏,  $\mathbf{J}$  を有限圏 (i.e.  $\text{ob}(\mathbf{J})$  も  $\text{arr}(\mathbf{J})$  も有限) とする. このとき,  $\mathbf{C}$  は任意の図式  $D: \mathbf{J} \rightarrow \mathbf{C}$  に対する極限を持つ.

*Proof.* “終対象と二項積=有限積” に注意すれば, 定理 1 の “集合サイズ” を “有限” に変えて全く同じ証明が通る.  $\square$

**系 3.** 1.  $\mathbf{C}$  を, 任意の (集合サイズの) 余積とコイコライザをもつ圏,  $\mathbf{J}$  を small な圏とする (i.e.  $\text{ob}(\mathbf{J})$  も  $\text{arr}(\mathbf{J})$  も集合). このとき,  $\mathbf{C}$  は任意の図式  $D: \mathbf{J} \rightarrow \mathbf{C}$  に対する余極限を持つ.  
2.  $\mathbf{C}$  を, 始対象と二項余積とコイコライザをもつ圏,  $\mathbf{J}$  を有限圏 (i.e.  $\text{ob}(\mathbf{J})$  も  $\text{arr}(\mathbf{J})$  も有限) とする. このとき,  $\mathbf{C}$  は任意の図式  $D: \mathbf{J} \rightarrow \mathbf{C}$  に対する余極限を持つ.

*Proof.* 双対.  $\square$

## 参考文献

- [1] Awodey, S., *Category Theory* (2nd ed.), Vol. 52. Oxford Logic Guides, Oxford University Press, 2008.
- [2] Bell, J. L., *Toposes and Local Set Theories: An Introduction*, Dover Books on Mathematics, 2008.
- [3] T. レンスター (斎藤恭司 監修, 土岡俊介 訳), ベーシック圏論 普遍性からの速習コース, 丸善出版, 2017.